
FATE/Cross Over story

一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A T E / C r o s s O v e r s t o r y

【Nコード】

N 4 0 6 5 Z

【作者名】

一人

【あらすじ】

聖杯戦争——七人の魔術師^{マスター}が七騎の英霊^{サーヴァント}を率いてどんな願いも叶えたとされる聖杯を求め争う殺し合い。

在るべき正史の物語は、在り得ぬ物語に淘汰される。

在り得ないマスター。在り得ないサーヴァント。在り得ない交わり。在り得ない登場人物たちによって、物語は迷走を始める——？

F A T E / C r o s s O v e r s t o r y

始まる。

一話 プロローグ（前書き）

なんか無性にやりたくなりました。
よければ見てやってください。

ちなみに作者はFATEのゲームはEXTRAしかやったことがありません、ので、御了承ください。

一話 プロローグ

聖杯戦争。

七人の魔術師が七騎の英霊マスターを従えて、聖杯を巡り争う殺し合い。サーヴァント

六〇年に一度の周期で、聖杯は冬木の地に舞い降りる。

マスターに選ばれた魔術師は、冬木市へと集い策を巡らし知略を尽くし、命を賭けて戦う。

そして、勝ち残った一組のマスターとサーヴァントが聖杯を手にすることができる。

これは、本来在るべき聖杯戦争のカタチ。

第三次聖杯戦争まで辛うじてカタチを為していた戦争のルール。

しかし、運命とは奇怪なものだ。六〇年周期に行われるはずの聖杯戦争が、わずか一〇年の時しか経っていないにも関わらず、再び始まるうとしているのだから――。

ここまでは正史通りだ。捻れひねくれ、曲がり^{まが}凶^{まが}ったこのシナリオでさえ、未だ正史から離れていない。

とある赤い魔術師は狼狽える。

「そんな……サーヴァントが十四騎……！？」

とある監督役はほくそ笑む。

「賽は投げられた。あとはただ転がっていくだけだ。さあ、殺し合え」

正史に存在する正規のマスターと正規のサーヴァント。

正義の味方と青銀の騎士王

赤い悪魔と紅い外套の弓兵

蟲蔵の少女と紫の騎兵

嗤う神父と蒼い槍兵

雪の少女と猛る狂戦士

武闘派教師と妖艶な魔術師

山門に縛られた剣豪の亡霊

狂った歯車は、在り得ぬマスターとサーヴァントを冬木へと招く。

正義の味方の義妹と死覇装の死神代行

英国清教の聖人と仮面の暴力神父

英雄の息子と外史の少女武将

とある学園の副会長と銀氷の魔女

一巡目の世界から来た青年と世紀末世界の太陽少年

運命の袋小路から抜け出た少女と蛇の名を持つ兵士

心を持った機械の乙女と最強の無刀の剣士

正義の味方は願う。この争いがなくなればいいと。

赤い悪魔は思う。父の無念を晴らし、一族の悲願を達成すると。

蟲蔵の少女は祈る。自らの愛する少年の無事を。

嗤う神父は暗躍する。すべては己の愉悦の為に。

雪の少女は望む。自分を裏切った父と父を奪った義兄を殺すと。

武闘派教師と魔女は誓う。互いを守り抜き、勝ち抜くと。

剣豪の亡霊は待つ。自分と渡り合える敵を。それが彼の渴望だから。

正義の味方の義妹は考える。この正義バカを生かしながら戦争を勝ち抜く方法を。

聖人は無心に挑む。救われぬ者に救いの手を差し伸べるのが彼女の誓い。

英雄の息子は思考する。上手くいけば、プランを一気に成功へ持っていけるかもしれないと。

とある学園の副会長は妄想する。ソレが手に入れば夢が叶う！と。
.....

一巡目の青年は幸運に感謝する。一巡目の世界を救えるかもしれないと。

運命の袋小路から抜け出た少女は嘆息する。私は馬鹿げた運命から逃れられはしないのかと。

心を持った機械の乙女は愛する少年に思いを馳せる。あの人にもう一度逢いたい——仲間の思いを背負って。

運命は回り始める。

F A T E / C r o s s
O v e r
s t o r y

始動。

一話 プロローグ（後書き）

今度からここにサーヴァントのステータスとか書きます。

二話 正史と外史の螺旋形――1

某県に位置する地方都市、冬木市。

その中に建つ豪邸では、怪しげな儀式が行われていた。

「閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。」

それは呪文。^{サーヴァント}英霊を召喚し、現界させるための、呪文。

「繰り返す都度に五度。ただ満たされる時を破却する」

その儀式をしているのは、赤いセーターに黒いスカート、艶やかな黒髪をツインテールにしてまとめている少女だ。

床には魔方阵が描かれており、彼女はその前に立ち握った右拳を突き出しながら呪文を紡いでいる。

「素に銀と鉄、礎に石と契約の大公、祖には我が大師シュバインオーグ」

儀式は順調に進んでいる。そう思って思わず笑ってしまう。それは学園のアイドルたる彼女に相応しく、そして御三家である遠坂家の令嬢たる彼女には当然の、優雅な笑みだった。

「告げる。汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ！」

成功を確信する少女だが、彼女は一番大事なことを忘れていた。そ

れは――

「汝、三大の言霊をまとう七天。抑止の輪より来たれ、天秤の護り手よ――！」

――それは彼女が、そして彼女の一族が代々受け継いできた呪いのようなもの――『うつかり』である。

「よっしゃ、成功……………アレ？」

おかしい。いつまでたつても自分の剣となり盾となるサーヴァントが現れない。

まさか、失敗？ いやいや、そんなはずはない。魔方陣はひとつも間違いはないし、媒介にした宝石だって私の持つ宝石の中でも高純度のものを使った。失敗するはずが――と、そこまで考えて気づいた。時計の示す時間。そこに示されていたのは、彼女の魔力が極限まで高まる時間帯の、一時間前。

万全に準備を整えて、いざ召喚の儀式をし、成功したと思った直後気づいた根本的な間違い。彼女は頭を抱えた。

――ズズウウウウン！

突如、他の部屋から轟音が響く。少女はビクウ！ と肩を震わせ、今度は何？ と言いたげな表情でその部屋へと向かう。

扉を開けると、酷い惨状だった。天井に穴が開き、家具は軒並み粉碎状態。無事なものを探す方が難しい。まるで何かが空から落っこ

ちてきたような、そんな感じのものだった。

その部屋の中には、ひとりの人物が座っていた。

人間の姿をしているが、明らかに人間ではない何かを感じる。

その男は、紅い外套をまとい、ガツシリとした体格、褐色の肌、白髪という出で立ちだ。

「誰よアンタ！」

その男を見て、少女は問いを投げた。その声に男は閉じていた眼を開き、鋼色の瞳で少女を見る。そして皮肉げに笑みを浮かべ、

「やれやれ、まさか召喚されて早々空中からの自由落下を体験させられるとはな。随分と乱暴な召喚をされたものだ」

やはり皮肉げな口調で少女に言った。

「アーチャーのサーヴァント、召喚に応じ現界した。問おう、君が私のマスターか？」

同時刻

イギリス第零聖堂地区

静かな教会の中、魔術師は目の前の光景にため息をついた。

そこには、

「あーと、とりあえず嬢ちゃんが俺のマスターでいいのか？」

赤毛に眼鏡、顔の右半分を隠すような作りの仮面、黒尽くめの神父服。まるで聖教者のような格好だが、まわりつく煙草の匂いがそれを打ち消していた。

（ステイルも煙草を吸っていますが、あれはあくまでも魔術を発動するための火種ですから仕方ないのしょうけど……）

ステイルというのは彼女の同僚であり、ルーン魔術のエキスパートである。彼が得意とするのは火の属性を持つルーンで、攻撃に特化している。そのためかは知らないが彼はよく煙草を吸っている。彼に言わせれば『ニコチンとタールのない世界は地獄』らしい。

ちなみにだが、そのステイルはマグヌスという魔術師はまだ十四歳の子供である。その割に背が高いので煙草を吸っていてもほとんど違和感がない。

（共通する部分もいくらかありますし……）

高身長、赤い髪、煙草、ピアス。ステイルのように眼の下にバーコード状の刺青は入っていないが、それよりも明らかに不良っぽい。とあるツンツン頭の高校生からはステイルは何でもかんでも燃やす不良神父と言われているが、こいつと比べればステイルの不良っぷりなぞ可愛いものだろう。

しかも、

（こいつの初対面での一言……）

あの言葉を思い出すと今でも腹が立つ。さっきのように理不尽にボコりたいくらいだった。

「……………そうです。私があなたのマスター、神裂火燄です」

「そうか。じゃあ俺も自己紹介するぜ。俺はアーチャーのクラスに現界したサーヴァントだ。真名は……別に言わなくていいか」

「まあ、その方が無難でしょうね。私が敵の術中にはまりあなたの真名をバラすかもしれないし」

聖杯戦争において、サーヴァントの真名がばれるのは致命的だ。なぜなら、真名が知られることによって他のマスターに自身のサーヴァントの弱点を知られてしまう恐れがあるからだ。例外として、自ら真名をばらす英霊もいたと聞くんが、それはあくまで例外だ。

「あー、そういうことじゃねえんだが……まあいいか。そういうことで」

「何か言いました？」

「いいや、何にも」

ドイツ

アインツベルンの城

「バーサーカー」

白い少女は霊体化して見えなくなっている従者に語りかける。

「■■■■……」

そんな声とは言えないような声が雪の森に響く。少女はそれに満足したようにうなずき、

「そうね。お兄ちゃんたちを殺してアインツベルンに聖杯を持ち帰るまで、私を護るのがあなたの役目。……信じているわよ、大英雄さん。」

その声はどこまでも無邪気でどこまでも可憐なもので、

どこまでも残酷な響きを持っていた。

日本 夜

磐戸台ポートアイランド

「あなたが私の『サーヴァント』でありますか？」

「……………」

薄暗い路地裏にて、ふたりの男女が向かい合って立っていた。いや、男女という表現は正しくないかもされない。どちらも人間ではないのだから。

ひとりは綺麗な金髪に蒼い瞳、およそ人間と遜色がないほどの容姿の、アイギスという対シヤドウ兵器だった。

ひとりは腕から肩までぴったりとつくような手甲に、下は黒い袴のようなものを、右肩からは紅く染まった女物の単衣ひとえを羽織った長身

のサーヴァント。

彼らは互いに人間ではないが、アイギスという少女兵器はヒトの心を持った機械の乙女であり、単衣のサーヴァントは生前日本最強の肩書きを持ったひとりの人間だった。

心を持った機械ニンゲンと最強を名乗った英雄ニンゲン。似通った部分を持つふたりは確認するように睨み合う。

「……………■ ■ ■」

サーヴァントの方は確認がとれたのか今まで向けていた視線を逸らす。それとほぼ同時に機械の乙女もサーヴァントに背を向け路地裏から出ようと歩きだす。それに追従するようにサーヴァントも歩きだし、やがてその姿を闇へと消した。

歯車が回り始める。

二話 正史と外史の螺旋形―1（後書き）

クラス：アーチャー

マスター：遠坂 凛

性別：男性

属性：中立・中庸

真名：????

ステータス

筋力：D 敏捷：C 耐久：C 魔力：C 幸運：E 宝具：E

A++

クラス別能力

対魔力：D 単独行動：B

保有スキル

千里眼：C 魔術：C - 心眼（真）：B

クラス：アーチャー

マスター：神裂 火燄

性別：男性

属性：混沌・善

真名：????

ステータス

筋力：B 敏捷：B - 耐久：B 魔力：A 幸運：D 宝具：A

クラス別能力

対魔力：C 単独行動：A

保有スキル

魔術：C - 浪費：A

クラス：バーサーカー

マスター：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

性別：男性

属性：混沌・狂

真名：????

ステータス

筋力：A＋ 敏捷：A 耐久：A 魔力：A 幸運：B 宝具：A

クラス別能力

狂化：C

保有スキル

戦闘続行：A 心眼（偽）：B 勇猛：A＋（不可） 神性：A

クラス：バーサーカー

マスター：アイギス

性別：男性

属性：中立・狂

真名：????

ステータス

筋力：A＋ 敏捷：A＋ 耐久：A＋ 魔力：D 幸運：E

宝具：A

クラス別能力

狂化：C

保有スキル

無窮の試練：A 戦闘続行：B 心眼（真）：A

三話 正史と外史の螺旋形――2（前書き）

いまさらですが、サーヴァントの真名は全員最初は伏せます。

三話 正史と外史の螺旋形――2

冬木市

とある教会にて

「さて、これから私がお前のマスターだ。命令には従ってもらうぞ」
そこには血の匂いが漂っていた。

奇妙なカタチの三つの痣――令呪が刻まれた左手を目の前に立つ蒼い槍兵、ランサーにかざしながら、不気味な笑みとともに神父――言峰綺礼は告げた。

その笑みは、とても聖職者とは思えないほどにいびつに歪んで、愉悦の形を型どっていた。

「ふざけんな……」

その言葉に、ランサーは憤怒の表情で吐き捨てた。

「てめえの下につく？ ふざけんじゃねえ。俺はその女に忠義を誓ったんだ。それをそう易々と翻してたまるか！ どうしても俺に言うこと聞かせたきゃ、令呪でも使うんだな」

彼の足元にはひとりの女性が倒れている。その人影からは、なぜか
シルエット
片腕が欠落していた。

言峰は彼女を騙し、ランサーを自らのサーヴァントとするために教会に呼び寄せ、不意を突いて令呪が刻まれた左腕ごと、斬り落としたのだ。

現最強の執行者である、バゼット・フラガ・マクレミッツを。仮に不意討ちとはいえ、歴代最強の執行者から左腕を刈り取るなど、生半可な力量ではない。その傍らに最速のクラス、ランサーのサーヴァントがいるならば尚更のこと。

しかし言峰は遣り遂げた。油断していたこの女からランサーを遠ざけることにより、その偉業を成し遂げたのだ。

「そうか」

ランサーの言葉を聞き、言峰は口元を歪める。そのまま左腕をランサーに向けて、命じる。

「ならばランサーよ。令呪によって命じる。マスター権限の譲渡を容認せよ」

令呪とは、サーヴァントに対する三度だけの絶対命令権。それは例えどんな英霊であろうと、抗うことは不可能であり、どんな命令であろうと、命じられた瞬間に従わなければいけない。それは、そう

——自害せよという命令でさえ。

「ぐっ……！」

ランサーは自身の身体に令呪による縛りがかかるのを感じた。これにより、ランサーは半ば無理矢理に言峰に従属を誓わされた形になる。

どんな英霊よりも誓いを重んじるこの男にとって、死に勝るほどの屈辱だった。

「ちっ、仕方ねえ」

いかにも渋々、どころか憎々しげな態度でランサーは言峰についていく。かつてのマスターだった女には見向きもしなかった。

「さて、それでは始めようか。第五次聖杯戦争を」

日本

麻帆良学園都市

少年、ネギ・スプリングフィールドは魔法使いだ。

少年、ネギ・スプリングフィールドは英雄の息子だ。

少年、ネギ・スプリングフィールドは中学教師だ。

少年、ネギ・スプリングフィールドは偉大な魔法使いを目指している。

そして、

少年、ネギ・スプリングフィールドは、魔法世界を救った英雄だ。

とある一室にて、ネギは書類を机に広げ、そのすべてに目を通していた。

その物量たるや、半端なものではない。そこにはさまざまな問題が英語で長々と記されている。ネギが英国人だということを考慮することだろう。

それにしてもこの量は、十歳の子供に背負わせるのは重すぎた。

「……いくらなんでも、多すぎですよ」

ネギはあくびしながらそう愚痴った。しかし、すぐに気を引き締め

るように頬をパンパン！ と叩き、

「ダメだ。フェイトもコタローくんも頑張ってるんだ。こんなところで弱音なんか吐いてられない」

ネギはふたりの友達を思い浮かべながら再び仕事に取り組み始める。

「もうすぐ『始まる』んだ。ノルマはきっちり終わらせなきゃ」

左手に浮かぶ令呪を見ながら、言う。

「だから、そのときはよろしくお願いしますね、ランサー」《……………》

「……………わかった」

その呼び掛けに応じるように、ひとりの少女が姿を現す。

高身長に赤みがかった髪、そしてその手には巨大な戟ほこが握られていた。

少女は無表情のまま、ネギを見つめ続ける。

ネギも少女に向き直り、決意を吐露する。

「僕は絶対に聖杯を持ち帰ります。そのためには、あなたの力が必要だ」

「……………」

「僕みたいにまだ十年しか生きてない子供に、十代で既に無双の英雄と言われたあなたを従える資格はないかもですけど」

「……………」

「それを踏まえてお願いします。僕と一緒に、戦ってください」

「……………わかってる」

少女はそこで、ほんの少しだけ顔を綻ばせる。

「……………恋が、ネギを勝たせてあげる」

「……………はい」

冬木市

「……………」

行き倒れを見つけた。

その女は紺のフードを身にまとい、顔まで隠すという恰好で、行き倒れていた。

イスラーム教徒か何か？ と高校教師、葛木宗一郎は考えながら行き倒れに近づく。

（息はある。呼吸は荒いが、少し休めば回復するだろう。ふむ……）

葛木はそこで、思考する。今ここでこの女を助けたとして、それをどう説明したものか。

行き倒れていたところを助けた、と言えいいのか？ しかし、肌という肌をすべてフードで隠すほどに貞操観念の強い女性にそれを説明したとして、それを納得してくれる保障はない。むしろ通報されるかもしれない。だからといって見捨てるという選択肢もないのだが……。

と、三秒ほど考えた末、葛木は迷うことなく女を背負い、自分の家に向かって歩き始めた。

彼女を家に連れ帰り（持ち帰り）、目を覚ました彼女と——キャスターと名乗っていた——ぼんやりと会話したときになぜか懷かれてしまい、その為に葛木宗一郎は聖杯戦争なるものにキャスターのマ

スターとして参加することになるのだが——現時点で、それを知る者はひとりもいなかった。

同じく日本

碧陽学園生徒会室

自称ハーレム王こと杉崎鍵は、今日も変わらず生徒会業務である雑務をひとりこなしていた。

別にこれは、彼が苛められているわけじゃない。

曰く、杉崎鍵はフェミニスト。

曰く、杉崎鍵は女の子大好き。

曰く、杉崎鍵はその場にいない方が女子からの好感度が上がりやすい。

曰く、杉崎鍵は厨二病と釘宮病を併発しているらしい。

曰く、杉崎鍵は女の子と楽しく過ごす為には、どんな努力も惜しまない――。

と、いうわけで。

彼は生徒会メンバーである女の子たち四人と楽しく会話したあとの仕事として、本来生徒会五人で行うはずの雑務をひとりで片付けている。

そこに苦痛や疲労の色はない。彼は彼女たちを幸せにするための一環として雑務をこなしているのだから、そんなマイナス面な感情が浮かぶわけがないのだ。

雑務を始めて一時間後。

一段落がつき、杉崎は大きく伸びをする。パキポキとなる背骨の音が心地よかった。

「つと、もうこんな時間か」

杉崎は生徒会室の掛け時計を見て呟く。熱中していたせいか、完全下校時間が迫っていたことに気付かなかった。

「続きは……明日早めに登校して片付けるか。なあに、普段より三十分早く起きれば問題はない」

誰も突っ込んでくれない状況でキャラを変えても虚しいだけだった。

杉崎は鞆を肩に背負い、校門を出た。

いや、正確には『出ようとした』だ。校門に近づいた直後、左手に焼け付くような痛みが走り、思わず杉崎は地面に膝をついた。

常日頃、生徒会メンバーにセクハラ紛いの言動をする為に、日常的に折檻や拷問を喰らわされる杉崎であるが、その痛みと比べても遜色ない、それよりも一点に集中した痛みのせいか普段のそれよりも激痛を感じた。

「ぐうう……何なんだ？」

杉崎は顔をしかめながら未だ痛む左手を見た。そこには、奇妙な三つの痣が刻まれていた。

「えーと……何だコレ？」

杉崎が模様が刻まれた左手を矯めつ眇めつしていると、後ろから「大丈夫かい？」という声が聞こえた。

声をかけたのは警備員のおじさんで、校門前に蹲っている生徒を発見し駆け寄ってきたらしい。

「いえ、何でもないです。すみません、ご心配おかけして」

そう言うと、杉崎は今度こそ校門をくぐり、自宅へと急いだ。

変な、夢を見た。

俺が、サーヴァントと呼ばれる使い魔のようなものと共に聖杯戦争を戦うことになるという、夢。

目の前にいたのは、神父。

なんともいけすかない笑顔を浮かべ、俺にこう言うのだ。

『喜べ少年。君の願いはようやく叶う――』

夢から醒めた。

ベッドから身体を起こした杉崎は寝呆け眼のまま部屋を見渡す。机、パソコン、つまれたゲームのパッケージ、美少女、玄関……アレ？
美少女？

「おわあ！？ 美少女！？」

「やっと起きたのか？ 私のマスターは存外ルーズなものらしい」

そこには美少女がいた。綺麗な銀色の髪。白人らしく、肌は透き通るように白い。瞳は青色で、パツチリとしている。明らかに日本人ではない。

そして何より、この少女の恰好が一際異彩を放っていた。

鎧だ。それも騎士が装着するような防御力重視の密閉性抜群の鉄の塊ではなく、機動力と軽量化を重視したような、急所だけを守るような造りの鎧だった。

だからこそ、思わず呟いてしまった杉崎は悪くない。

「コスプレ？」

「なぜそうなる」

美少女は顎に指を添え、考えるような素振りを見せる。

可愛い。

……じゃなくて。

「あ、あの、さ」

「ん？ どうしたマスター？」

「ちょっとそこの携帯とつてくれるか」

「む？ ああ、ほら」

美少女は携帯を投げるように渡してくる。それを受け取り「ありがとう」と笑顔で礼を言い、携帯を開き電源を入れる。

そのまま『ピ、ピ、ピ』とある番号を入力し、通話ボタンを押す。

「あ、もしもし。警察ですか？ 不法侵入です」

ガシィ！！ と美少女の腕が高速で動き、杉崎の持つ携帯を神速で奪う。そして流れるような動作で携帯を押し折り、そのまま近くに置いてあったゴミ箱に叩き込んだ。

「つてああ！ 俺の携帯！！」

「いきなり警察などに連絡するからだ。私は別に不審者ではない。貴様が召喚したサーヴァントだ」

「いや、どー考えても不審者だろ。いくら美少女だからって、コスプレして朝早くから他人のそれも男子高校生の家に勝手に上がり込んであまつさえ俺の携帯を押し折る行為に及ぶというのはいかななものかなあええ！？」

「い、いや、それについては悪かったと思ってはいるが、しかし突っ込みをするところは果たしてそこなのか……？」

「いや、絶対にそこしか……あ？」

そこまで言っただけだった。今、美少女の言葉の中に聞き覚えのある単語があった気が……。

「サーヴァント、って、何なんだ？」

「ふむ、やつと話が主軸に戻ってきたな。そう。私は貴様が召喚したサーヴァント。クラスはキャスターだ」

と、美少女——キャスターは告げた。そのまま、彼女は十分に渡り説明を杉崎に続けた。令呪のこと、聖杯戦争のこと、他の七騎のサーヴァントのこと、それらをすべて倒すことにより勝者にもたらされるあらゆる願いを叶える願望器のこと——。

「そんなことが……」

「ああ、そうだ。そして、サーヴァントのマスターに選ばれるのはより強い願望と一定以上の腕を持つ魔術師だけなのだが、ごく稀に魔術師でも何でもない一般人がマスターとして選ばれることがある。恐らくマスターはその類だろう」

「そう、なのか……」

プルプルと身体を震わせる杉崎。キャスターはそんなマスターを見て、何ごとか？ と覗き込む。

「すっげえええええ！」

絶叫するマスターを見て、キャスターはビツクウ！！と肩を震わせる。

「いきなり何だと言うのだ！？ 錯乱したか？」

「これまでの会話で分かったけど、キャスターって可愛いつつか綺麗な顔してるのに、言うことがかなり辛辣だよな」

「だがしかあし！！ と杉崎はそこでビツカア！！ と眼を輝かせ（軽く人体の神秘）、ピカピカの実の能力を使ったかの如く全身から光を放出しながら（かなり迷惑だ）、キャスターに言う。

「今はそんなことを気にしているときではない！ 俺は今、猛烈に興奮している！」

「あ、ああ。それは分かるぞ。端目から見ても」

「その『聖杯』さえあれば、俺の願いも一発だ」

「ほう。貴様の願いか。いったいどんな願いなのだ？」

「それはな……」

杉崎は一度言葉を切り、すうーっ、と深く息を吸って、

「俺の願いはっ、ハーレム王国を築くことっ！！！！」

「……………死ね」

「うおおあつ!?!」

剣を引き抜いたキャスターはふざけた願いを宣ったマスターを世の女性たちの平和の為、殺すことにしたらしい。

「待たんか下衆が!! 貴様のような輩は、私が今叩き斬ってくれる!!」

「うおおあああああああ!?! スイマセンでした! 調子乗ってましうひい!?!」

そこには、サーヴァントとリアル鬼ごっこを繰り広げるマスターという、とてもとても不思議な画があった。

三話 正史と外史の螺旋形―2（後書き）

クラス：ランサー

マスター：言峰 綺礼

性別：男性

属性：秩序・中庸

真名：????

ステータス

筋力：B 敏捷：A 耐久：C 魔力：C 幸運：E 宝具：A

クラス別能力

対魔力：C

保有スキル

戦闘続行：A 仕切り直し：C ルーン：B 矢避けの加護：B

神性：B

クラス：ランサー

マスター：ネギ・スプリングフィールド

性別：女性

属性：中立・中庸

真名：????

ステータス

筋力：A+ 敏捷：A++ 耐久：A 魔力：D 幸運：D 宝具：

EX

クラス別能力

対魔力：B

保有スキル

騎乗：A 心眼（真）：A

クラス：キャスター

マスター：葛木 宗一郎

性別：女性

属性：中立・悪

ステータス

筋力：E 敏捷：C 耐久：D 魔力：A+ 幸運：B 宝具：C

クラス別能力

陣地作成：A 道具作成：A

保有スキル

高速真言：A 金羊の皮：EX（不可）

クラス：キャスター

マスター：杉崎 鍵

性別：女性

属性：中立・善

真名：????

ステータス

筋力：E 敏捷：C+ 耐久：D 魔力：A 幸運：B 宝具：EX

クラス別能力

陣地作成：B 道具作成：B

保有スキル

魔術：B 策謀：B

四話 正史と外史の螺旋形――3

冬木市

間桐邸宅

今日もお爺さまによる調教を終え部屋に戻ろうとする私の前に、ふたつの人影が現れた。

ひとりとは私が召喚したサーヴァント、ライダーだ。紫の眼帯まるでアイマスクをかけ、薄紫色の長髪を背中に垂らし、とても露出度の高い黒い服を着ている、私の従者。

もうひとりとは私の義兄である間桐慎二。彼の手には一冊の本が握られている。

『偽臣の書』

本来のマスターである私からライダーとのパスである令呪を写し変え、その本を持つ者をそのサーヴァントの疑似的なマスターにする魔道具だ。

あれが、私からライダーを奪ったモノ。

あの蟲蔵の中での地獄を生きる私の、この屋敷での唯一の私の理解者を、奪った――。

「……い。おい。聞いているのか、桜！」

その声にハッと我に返る。

気づくと、目の前まで義兄が近づいていた。

「……はい」

「……ふん。まったく、相変わらず鈍臭い奴だ。何でお爺さまはこんなグズを養子にもらったんだか。こんな奴よりも、僕の方がよっぽど優れているっていうのにさ」

義兄は散々私を詰^なったあと、高笑いしながら私の横を通り過ぎていった。

ライダーは私を心配そうに見ながら（見えているのだろうか）、義兄についていった。

またひとりだ。

また、独りなんだ。

先輩……！

日本
どこかの廃屋

びちゃびちゃと何か液体がこぼれ落ちる音が響く。

それは赤い液体で、それは鶏の首切り死体で、それを握って何やら怪しい陣を描いているのは、黒髪の青年だった。歳は十九から二〇歳くらい。ボサボサになって、アホ毛ともとれるピンと跳ねたシルエットが特徴的だ。

青年はやがて描き終わると、台座のようなところに何かを置く。

銃らしき残骸と、緑のレンズのゴーグルだ。

青年は令呪の刻まれた左手をかざし、唱え始める。

「閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。繰り返す都度に五度、ただ満たされる時を破却する」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が師、ローラ・スチュアート」

「降り立つ壁には風を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いをここに。其は常世総ての善と成る者。其は常世総ての悪を敷く者」

「汝、三大の言霊をまとう七天。抑止の輪より来たれ、天秤の護り手よ——！」

風が吹き荒れる。魔方阵を中心とした暴風が過ぎ去ったとき、その中心にはひとりの人物が佇んでいた。

赤のマフラーに緑色のレンズがはまったゴーグル、腰のホルスターには奇妙な形をした銃。服装は半ズボンに半袖のジャケット。英雄というよりはやんちゃな少年という言葉がよく似合う。開いたその瞳はいかにも勝気な光を灯していた。

「サーヴァント、ライダー。召喚に応じ現界した。問おう、あなたがオレのマスターか？」

「ああ、僕が君のマスターだ」

それだけ。それだけの言葉を紡ぎ、青年は再び押し黙る。自身のサーヴァント——ライダーがどれほどのものか確認するためだ。

聖杯戦争に参加するマスターには、他のサーヴァントのステータスを読む能力が与えられる。それを使い、青年はライダーのステータスを読む。

「……………」

しばらくステータスを見ていた青年だったが、やがてため息をもらしボロボロの椅子に座る。

ライダーのクラスに現界した英霊は、三騎士のように対魔力を持っているわけではない。その代わりに強力な宝具を用いた殲滅戦を得意とする。それがライダーの持ち味である。

それが問題だった。ライダーに非があるわけではない。魔力を供給する、自分の身体に問題があるのだ。

彼は複雑な事情で身体が普通の人間とは異なる仕組みになっている。間桐の蟲やアインツベルンのホムンクルスのような『人工』とは違う、『天然』の身体変異者。

彼や、彼の同類のことを、ロイヤル・ダーク・ソサエティ王立科学狂会や法王庁といったその事情を知る組織は俗に『悪魔』と称する。

しかも、この青年はかなり特殊な悪魔であり、おそらくこの世界においては一とりしか存在しないだろう。

そんな彼は、世界からの修正力——平たく言うと、バグを消そうとする力により、存在を拒絶されている身だ。今は目立った動きは極力控え魔力を温存しているが、聖杯戦争が始まったとき、果たして無事に勝ち残れるだろうか、或いは負け延びれる《…………》だろうか。自分に、ライダーというサーヴァントを、最後まで扱い切ることができるのか？

(…………やるしかない)

どのみち、最も危険で最も利益が見込めるこの戦いで勝ち残るしか、今のところ打てる手立てはない。

青年は決意を固め、立ち上がる。

ライダーはそれに楽しそうに笑い、霊体化しながらついていく。

日本

柳洞寺

「見事な月よ……」

山門の階段に腰掛けながら、紫の着物を着た侍が呟いた。

整った顔立ちに男としても女としても長く感じられる髪を、髪紐で後頭部の辺りで結っている。

その手には、長い刀が鞘に納まった状態で握ってある。

「街に出て強者を探しに行けぬというのは、些か興ざめもいいところ

るだが」

侍は嘆くように山門を見る。

それは何の変哲もないものだったが、侍には分かる。

これが、自分をこの場に縛り付けているものだ。

あの性悪女狐キヤスターがこんなものをよりしるにして自分を呼び出さなければ、散歩がてら強者と剣を交える機会も在っただろうにと。

だがまあ、そんなことを悔やんでも詮なきこと。

「今はただ、この月を見ることで無量の慰めとするか」

侍——アサシンは薄く笑い、再び階段に腰を降ろす。

酒でもあればもっとよいのだがと思ったが、侘しくなるので口には出さなかった。

日本

とある片田舎、離見沢村

「羽入、どこにいるの羽入！」

夜遅くの雛見沢。季節も冬に移り変わり、都会と比べ格段に冷え込んできた山中を、ひとりの少女が声を張り上げ歩き回っていた。

小学生ほどの少女だ。青く長い髪を揺らしながら、懸命にある人物の名前を呼んでいる。

その人物とは――

「どうしたのですか、梨花？」

ひょっこり草むらから顔をだしたのは、少女――梨花と変わらない歳ごろの少女だった。

この寒空の下、妙に露出の多い巫女服を着ていた（上が脇が丸出しということだけで、袴は普通だ）。紫の髪、そして角のようなものが左右から正面に向けて二本ずつ生えている。人間とは思えない風情だった。

そう、彼女は人間ではない。

彼女はこの雛見沢において古くから言い伝えられている祟り神、『オヤシロさま』の正体だ。

つまり、神様である。

実際崇り神というのは迷信と真実で半分半分だった。

彼女が人知を越えた力を持っているのは事実だし、彼女が長いこと崇り神として信仰されているのも事実だった。

そんな、ある意味では有り難く、ある意味では村人からの畏怖の対象である彼女は、

「出てくるのが遅いッ！」

「あうっ」

人間の少女にあらうことか拳骨を喰らっていた。

頭を押さえながら蹲る神様に、梨花は苛立ちを込めた視線をぶつけながら、

「さっきから何回呼んだと思っているの？ 何回呼ばせば気が済むの？ こんな寒空の下探し続けた私の身にもなりなさい。沙都子に見つからないように家を抜け出すのも一苦労したのに、何で重ねて苦勞を押しつけようとするの？ 暗い夜道の中十分以上も呼び続けた私にあなたはいったいどんなお詫びをしてくれるのかしら？ 答えなさいよ羽入。あうあう言ったら許してくれるなんて、まさか思っていないわよねえ？」

罰当たりだった。

とても小学生の少女の言葉遣いとは思えない。

まるで百年生きた魔女のように辛辣な言葉を次々と投げかける。

「ご、ごめんなさいです」

羽入が涙目で謝るのを見て許す気になったのか、梨花は険悪な表情を和らげる。

「それで、こんな時間に何をしていたの」

梨花の疑問は最もだった。そもそもこんな時間に山中を物色している（ように見える）というのは、余りにも不自然だ。

羽入は未だに痛む頭をさすりながら、とある建物を指差す。

怪訝そうな顔をしてそちらを見る梨花。

「な、にあれ」

梨花は目を見開き後退りする。尻餅をついてしまいが、そんなことは気にならなかった。

羽入が指差した建物、それは『祭具殿』と言われる蔵だった。

ここ、雛見沢は昔、『鬼の住む村』とも呼ばれ、恐れられたという。

その言い伝えの基となったモノがそこには仕舞われていた。

露骨に言えば、それは『封印』と表現しても差し支えない。

まず村人は全員立ち入り禁止であり、部外者が入った暁にはどんな目に遭わされるか分らない——と、部外者のくだりはさすがに違うが、それほどまでに厳重に管理されている。

梨花が見た異変はふたつ。

ひとつは祭具殿の門が外され、扉が半開きになっていること。ひとつはその隙間から怪しげな光が見えたこと。

梨花はしばらく呆然としていたが、やがて意を決したように立ち上がり、羽入を引き摺りながら祭具殿の中へと進んでいく。

「あうあう、何でぼくまで連れていくのですか？」

羽入はジタバタと梨花から逃れようとするが、梨花も渾身の力で羽入を引っ張る。

「しっかりしなさい。神様なんですよ？」

「それとこれとは話が別なのですよ——！」

「その喋り方をやめなさい。タバスコ飲むわよ」

「はう——！？ か、辛いのは苦手なのです——」

だったら来いと言わんばかりに梨花は羽入を引き摺る。やがて羽入は諦めたようにおとなしくなり、『やめましようよ』だの『もう帰りましよう。ね？ ね？』だの小声で言いながらついてくる。梨花はそれをガン無視で進む。

——雖見沢に降り掛かる災厄は許さない。私は大人になるまで、絶対に死なない！

梨花がそう思った瞬間。

「ぐっ……う……ッ！？」

左手に激痛が走る。焼きごてでも捺されているのではないかというほどの痛み。耐え切れずにしゃがみ込む。痛みで思わず涙が溢れるが、そんなことに気づけるような状態になかった。

痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。痛い痛い痛い。

（私、死ぬの？）

そんな考えが頭に浮かぶ。

(
⋮
いやだ
)

痛みの中

(いやだ)

その願望が――

(いやだ!!)

直後、光が最高潮に達し、突風が吹き荒れる。

霞む視界の中、かろうじて映ったのは、

緑の迷彩服を着、眼帯を右目につけた兵士のような男だった。

「サーヴァント、アサシン。召喚に応じ現界した」

（サー、ヴァント？）

その言葉に聞き覚えはないが、今はとにかく気を失いたかった。

もう痛みには耐えられない。

そのまま眠るように梨花は目を閉じた。

梨花が目を覚ましたのは二日後。

そのとき周りにいたのは心配そうに自分を見ている仲間と、

「む……こんな風でいいのか？」

「違いますよ。こうです、こう」

キッチンで料理らしきことをしている赤坂と、アサシンだった。

「……もうやだ、こんな人生」

その嘆きは、リストラを繰り返された会社員のような諦観の色があった。

四話 正史と外史の螺旋形―3（後書き）

クラス：ライダー

マスター：間桐 慎二（間桐 桜）

性別：女性

属性：混沌・善

真名：????

ステータス

筋力：B 敏捷：A 耐久：D 魔力：B 幸運：E 宝具：A+

クラス別能力

対魔力：B 騎乗：A+

保有スキル

魔眼：A+ 単独行動：C 怪力：B 神性：E

クラス：ライダー

マスター：夏目 直貴

性別：男性

属性：秩序・善

真名：????

ステータス

筋力：C 敏捷：B 耐久：C 魔力：A 幸運：C 宝具：A

クラス別能力

騎乗：B 対魔力：D

保有スキル

魔力補給（日中）：A 気配遮断：C 魔術：A

クラス：アサシン
マスター：キヤスター
性別：男性
属性：中立・悪
真名：???
筋力：C 敏捷：A+ 耐久：E 魔力：E 幸運：A 宝具：??
クラス別能力
気配遮断：D
保有スキル
心眼（偽）：A 透化：B+ 宗和の心得：B

クラス：アサシン
マスター：古手 梨花
性別：男性
属性：中立・中庸
真名：???
ステータス
筋力：D 敏捷：C 耐久：C 魔力：D 幸運：D 宝具：EX
クラス別能力
気配遮断：A
保有スキル
カリスマ：B 格闘術：A 軍略：C

五話 正史と外史の螺旋形――4

日本

衛宮邸

「どうしたものかなあ……」

居間で士郎の料理を待ちながら呟いた。それは独り言で、たぶん疲労の色が濃く出ていたと思う。

ふと視線を落とし、左手の令呪を見る。私がマスターであることの証。

士郎には秘密だ。当たり前である。士郎は他人ヒトが困っているとな誰だろうと助けようとする傾向がある。……まあ、さすがに極悪人とかは救おうとは思わないだろうが。

士郎には魔術師同士の殺し合いなんて見せたくはない。士郎にはずっと一般人として過ごしてほしい。

士郎は私のオアシスのような存在だ。意地汚く、薄汚い心しか持っていないなかった私を受け入れてくれた。

士郎は、士郎には絶対に知られたくない。聖杯戦争の存在を。

それが、今はもういない伯父キリッケと交わした、唯一の約束。

それが、今はもういない伯父の唯一の願い。

『士郎には幸せに生きてほしい』

そのためになら、私はどんなことだってできる。

士郎に害をなす奴らは皆殺しだ。

それが私に——衛宮志音にできる、ただひとつだけの贖罪行為。

士郎を殺しかけた、私にできる、唯一の贖罪だ。

衛宮志音は魔術師だ。

衛宮士郎は魔術遣いだ。

衛宮志音は、衛宮家の家督を捨て失踪した衛宮切嗣と、その切嗣を失踪させた衛宮士郎を殺すために、冬木市へとやってきたのだ。

衛宮邸にたどり着いたときに衛宮志音が見たのは、着着物を着て縁側で月を眺める衛宮切嗣と、その切嗣の隣に同じく座って空に浮かぶ月を見上げる赤毛の少年——衛宮志音とそう変わらない年頃に見えた——が話しているという光景だった。

その光景を見て衛宮志音は愕然とする。

あの魔術師殺し《キリングマシン》、衛宮切嗣が、まるで実の子を見るような慈しみの溢れた笑顔で少年と話している。志音が衛宮本家で聞かされた衛宮切嗣の人となりとは天地の差だった。

それに、

(……妙にやつれている……病気か?)

衛宮切嗣の顔色は、健康な人間のそれではない。何か病魔、もしくはそれよりなお悪いものに蝕まれている、死の淵に立たされているような、そんな顔色だ。

それでも衛宮切嗣は笑顔を絶やさずに赤毛の少年と会話する。それが唯一自分にできることだと言わんばかりに。

「……ッ」

躊躇するな。あいつは裏切り者だ。離反者だ。衛宮の名を貶めた面汚しだ。殺せ、殺せ、殺せ――

「……誰だ」

衛宮切嗣は、それまで浮かべていた笑顔を引っ込め、代わりに戦士としての――魔術師殺しとしての冷酷な顔を見せる。

――それでいい。

これで躊躇する理由はなくなった。

「衛宮家五代目当主代理、衛宮錐雪のひとり娘、衛宮志音」

「衛宮……だと？」

衛宮切嗣は眉を潜めて志音を見る。なんでいまさら自分のところに現れたのだと。

衛宮志音はその年齢に不釣り合いな、妖しい笑みを浮かべて答える。

「現当主代理は、衛宮家の研究成果を持ち逃げした衛宮切嗣と、そうさせた衛宮士郎を殺害するという決定を下した。私はその執行をするために来たの」

「持ち逃げ？ そんなことはしていない。僕は……」

「黙れ。離反者に弁解の余地は与えない」

衛宮切嗣の反論をにべもなく拒絶し、懐からあるものを取り出す。

「あなたには、百年分の生き地獄を味わってもらっ」

その手に握られているのは小型ナイフ。刀身には複雑な紋様が刻まれており、一目で魔術礼装であることが分かる。

ムーヴパラドックス

「内外逆行というものだそうです。突き刺したものの内面時間と外面時間を逆方向に推移させる礼装ですよ。あなたには、それをミリ単位で進行させます。矛盾を起こした身体の激痛を楽しみながら、死んで下さい」

「いい笑顔で言われてもね……僕はほら、もうこんなだし？」

そう言いながら肩をすくめる。袖口から見えた手は痩せ細り、魔術師殺しだった頃の面影はどこにもなかった。

ギリ、と衛宮志音は齒軋りする。この男の一挙一動はなぜか心にとげを立てる。鬱陶しいことこの上ない。早く、早く殺さないと――

「……とにかく、私はあなたを殺します。それが」

――お母様の、命令だから。

内外逆行の切っ先を衛宮切嗣に向けながら、ゆっくりと歩み寄っていく。あと五歩、四歩、三歩、二歩――のところで。

「じいさんに、なにするつもりだよ」

唐突に何の前触れもなく、そこにいるのが当たり前のように自然体で、さながら流動する空気のように、志音と切嗣の間に入り込む小さな影。

赤毛の少年だった。

「何って……殺すんです」

「だめだ」

「あなたに決められることはありません。私は当主代理の命令で……」

「それは、あんたがほんとうにやりたいことなのか？」

ぴくり、とナイフを持つ右手が震えた。

「そんなこと、あなたには関係ありません……」

「いいや、かんけいある。おれはじいさんの、衛宮切嗣のこどもだ」

「所詮養子でしょう？ 仮にも血縁関係のある私よりあなたの方が衛宮切嗣と近いとでも？」

「あたりまえだ」

ナイフを目の前に突き付けられていながら、微塵の動揺も見せない赤毛の少年の姿に、衛宮志音は恐れるように一歩下がる。

「……何なんです、あなたは」

「おれは、衛宮切嗣の――」

——正義の味方の、息子だ。

揺るがないその視線に衛宮志音は明確なキョウフを抱く。

何だこいつは？ 歪にもほどがある。外面と内面が噛み合っていない。外面の平凡さと反比例するように内面の歪みは大きく、まがまがしい。矛盾を平然と受け入れる、清濁関係なく受け入れる、不可思議な子供。

ナンダコイツハ？ コンナイビツナ、歪ンダ子供が存在シテイイノカ？ コワイ、コワイ、コワイ、コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ——

「……ハッ!？」

そこで正気に戻った。目の前には変わらず衛宮切嗣を護るように立ち塞がる、赤毛の少年の姿。その後ろで困ったような苦笑を浮かべている切嗣。

手の震えは最高潮に達していた。

ナイフを取り落とす。

カラン、と音を立てて地面に転がり、赤毛の少年の足元に滑る。

「……あれ？」

赤毛の少年は膝を屈してしゃがみ、ナイフへと手を伸ばす。

「あ、ダメ……ッ!!」

咄嗟に止めようとする志音だったが、次の瞬間そんな考えは根こそぎ吹き飛ばされた。

「解析、トレース・オン開始」

少年が呟いた、その瞬間にナイフは解析された。

そして一刹那の後、内外逆行の隣にはもう一本のナイフ。

カタチは内外逆行とまったく同一。見分けがつかないほどに。

ただ、それは外面を取り繕った内面ナカミのない出来損ないだ。

触れれば瞬く間に散り散りに壊れそうだった。

「何者なんです、あなたは……」

「何って……」

少年は困ったような表情を浮かべる。本人にもよくわかっていないらしい。

いよいよこの少年の正体が掴めなくなってきたとき、

「……ゴホッ」

衛宮切嗣がせきをして、口元に手をやる。その隙間から見えてくるのは、赤黒い液体——吐血したのだ。

「じいさんッ!?!」

少年は慌てて衛宮切嗣に駆け寄る。

「大丈夫だよ、士郎」

切嗣はそう言って笑うが、その表情は見ていて痛々しいくらいに辛そうだ。

思わず志音も近づいてしまったくらいである。

「……私が、手を下すまでもないようですね」

「……どうやらそうみたいだ、ゲホッ」

またむせる。そんな衛宮切嗣を介抱する少年が、ふとなぜか誰かに似ているような錯覚に陥った。

——ああ、そうか。

——この子、私と同じなんだ。

似ているのではなく同じ。

相似ではなく合同。

重ねれば寸分の違いもなく綺麗に合わさる、鏡合わせな存在。

かつて父親が死ぬ間際まで、志音が行い続けたことを、この少年は実行している。

何もかも投げうって、自分すらも勘定に入れず。

人間としてコワレテいる思考。

歪み切った目的意識。

この少年は、たぶん命の危機に晒されても他人を救おうとする。

私と、同じように——。

気づけば、衛宮志音は衛宮切嗣の手を握っていた。

標的であることも忘れ、命令すらも無視して。

伯父に、接している。

切嗣はびっくりしたような顔をし、ついで弱々しく微笑んだ。

「君に、頼みたいことがある」

呆気にとられた。先程まで命を狙っていた者に、なんてことを言っているのだろう。

「士郎を頼む。この子を、幸せに……して、欲しい」

切嗣はそう告げた。

志音は、頷いた。

無意識の内に、受け入れた。

「よかった……」

切嗣は最期にそう言うと、それっきり動かなくなった。

魔術師殺し、衛宮切嗣。

彼はこの晩、ふたりの子供に看取られながら、静かに息を引き取った。

あれから数年。士郎は高校二年生、私は高校一年生になった。

通う高校はどちらも私立穂群原学園。毎朝衛宮邸に朝ご飯をたかりにくる藤村大河、通称タイガー（本人の前では禁句）も穂群原学園の教師だったりする。あの性格でよく面接受かったよな、と思うが事実高校教師をしているのだから受かったのだろう。……実家の権力使って無理やり合格させていないことを祈るのみだ。

あの夜、私は途方に暮れていた。標的であつた男に士郎のことを頼まれ、その男はそのまま息絶えてしまったのだから、混乱することに罪はないはずだ。

士郎を殺すことは簡単だ。内外逆行を使わずともいくらでもやりようはある。

今となつてはわからないが、その時点であれば赤子の手をひねるより簡単だった。

でも、私は殺すのを拒んだ。自分と同じ存在を殺すということは、即ち自分を殺すということに等しい。

自殺である。

そんなのは真つ平ごめんだつた。少なくとも自殺などで殺されるのは、末代までの恥だ。

だから私は衛宮切嗣が言い遺したとおりに、士郎を護り続けた。

でも結局無駄だったということだろう。

士郎はその歪みを内に抱えたまま、成長してしまった。

あとはもう坂道で石ころを転がすの如く、止め時など見つけれないまま運命は進むだろう。

願わくば、士郎がマスターに選ばれるような異常イレギュラーが起こりませんように。

初戦開幕 - 1 紅い弓兵、蒼い鎗兵（前書き）

今年最後の更新とします。

初戦開幕 - 1 紅い弓兵、蒼い鎗兵

魔術は秘匿されるものだ。

魔道は一般人に知られてはならない、禁忌の道。

一般人にその存在が知られた場合、その一般人は記憶を消されるか、殺される《……》かの結末を辿るだろう。とあるファンタジー大作では魔法を一般人に知られれば、バラした魔法使いを永久的に魔法を使えないようにするらしいが、それと同じようなものだ。ただ被害を被るのが魔術師本人から目撃者へと変わるだけだ。

そして、その集大成とも言えるような聖杯戦争という『儀式』は、基本的には人々が寝静まった夜中に行われる。さらに戦闘の音や被害が極力及ばないように結界を張った上で。

しかし、物事というのは往々にしてうまくいくものではない。

それは、今現在戦っている彼らにも訪れる――。

深夜の私立穂群原学園にかん高い金属音が響き渡る。

穂群原学園の校庭の中心で、ふたつの人影が戦っていた。

ひとりは全身を青のタイツのようなものに包み、その上から重ねて蒼い鎧をつけた男性。もうひとりは紅い外套を身にまとった白髪褐色の肌、鋼色の鷹のような瞳の男性。

互いに己の得物をぶつけ合い、殺し合っていた。

蒼い武人は赤い鎗、紅い武人は白と黒の双剣。

蒼い鎗兵はひたすら突きを繰り出し、紅い弓兵はそれをいなしながらカウンターの叩き込む。

その刺突は人間の知覚速度を越えていて、その斬撃は人間の反応速度を越えている。

人間ではない、人外の御業。

赤と白黒の剣閃が交差し火花を散らす。熾烈を極める演舞に、その戦闘を見ていた紅い武人のマスター、遠坂 凜は息をするのも忘れ見入っていた。

見惚れていた。

（……デカイ口叩くだけはあるわね。最初ナメた態度で接してきたときはハズレかと思ったけど）

彼女は密かに自身のサーヴァントへの評価を改めた。そうだ。どんなに性格が悪かろうと英雄なのだ。

そもそものクラスである『アーチャー』としての特性、遠距離狙撃

を使わずに、恐らくはランサーのクラスと思われるサーヴァントと対等以上に渡り合う彼が並以下の英霊ということはあり得ない。

凜が彼に勝算があるのか問い質したときに、不敵な笑みを浮かべて言い放った言葉を思い出す。

『無論だ。この身に敗北はなく、この身に敗走はない。きみは何の心配もせず、ただ命じればいい。『勝て』とな』

(その言葉……信じてるわよ?)

凜は胸元でそつと右手を握って戦いの行く末を見守る。

ところで、この戦いを見ているのは凜と、ランサーのマスターだけではなかった。

約二キロ離れたビルの屋上で、ふたりの人影が戦いを見ていた。ひとりにはビルの縁に腰掛け、ひとりはその人影の後ろに立って煙草を吸っている。

神裂 火熾ともうひとりのアーチャーである。

「戦況はどう見ます?」

神裂はアーチャーに尋ねる。

「あー？ そうだな。とりあえず青タイツ野郎が押してるように見えるな。紅いのはカウンターを叩き込んでるとはいえ、防戦一方なのは変わらないみてえだし」

アーチャーは顎に手を添えながら述べる。眼鏡の奥の眼には『どうでもいい』という感情が浮かんでいる。

それに神裂は、

「そんな素人が見ても分かるような意見を言えとは言ってません。英雄であるあなたから見て、どちらに転がるか、です」

神裂は肉眼で観戦しながら淡々と言う。

「愛想がねえな」

「サーヴァントに愛想を振りまくマスターというのも笑い者ですが」

「違いねえ」

ハッ、と笑いながら、アーチャーは簡潔に述べる。

「この勝負、たぶん引き分けか痛み分けか……少なくとも脱落はしねえな」

「なるほど」

神裂は納得したように頷く。問うた本人もサーヴァントと同じ意見を持っていたのだろう。

「あの蒼い鎗兵……やはりランサーでしょうが、動きがどこことなく不自然です。とても最速のクラスとは思えない」

「令呪の縛りを受けてるか、サーヴァント自身に全力が出せない理由があるのか……まあ、たぶん前者だな」

アーチャーは心底退屈そうに言う。こんなことするより早く帰ろうぜ、みたいな雰囲気を出している。

そんなアーチャーを横目遣いで見て、

「さて……行きましょうか」

と神裂は立ち上がる。

「行かつて……キャバクラ？」

「……………」

バシン……と問答無用で神裂はアーチャーの顔面にビンタを喰らわせた。

「んがつ！？ な、何しやが……ッ！」

アーチャーはいきなり顔面ビンタを喰らわせたマスターを非難じみた目で見ろが、

「バカなことを言っていないでさっさと行けっつってんだよ」

「……スイマセン」

神裂のともない威圧と殺気にあっという間に屈してしまっていた。

戦いは佳境に入っていた。

目まぐるしく動くふたりの武人。暗闇に浮かぶ剣閃。

たとえ無視しようとも否が応でも視界に入れざるを得ない、惹き付けられる武踏。

互いに一度距離を取り、決め技を放とうとしたそのとき。

ガサリ、と草を踏み抜くような音がした。

「誰だ！」

鎗兵がそちらを睨む。そこにいたのは、

「……………ッ!？」

赤みがかった髪、平凡そうな出で立ち、私立穂群原学園の制服を着た男子生徒だ。

男子生徒はそのまま踵を返して校舎へと逃げ込む。鎗兵は「目撃者は逃がすワケにやいかねえな」と呟き男子生徒の後を追う。

「まずい……まだ帰宅していない生徒が……!？」

凜は歯噛みする。人が残っていないだろう完全下校時刻を狙って戦いに臨んだのに、『念の為』の確認作業をすっかり忘れてしまっていた。

「くっ……アーチャー!」

凜は自身の従者に叫ぶが、アーチャーはすまし顔で、

「別に放っておいても構わんだろ。こちらの手間が省けるのだからな」

「何言ってるのよ!! 放っておくって、みすみす殺させようっての!？」

「生憎と、私は現実主義者でね」

アーチャーは肩を竦めて会話を打ち切る。これ以上は私から言うこととはないとばかりに。

凜はしばらくアーチャーを睨みつけていたが、やがてため息をつき、

左手の甲をアーチャーに向けて脅すように言う。

「なら、令呪でやらせてもいいのよ?」

「……………」

アーチャーはその言葉に、苦い表情を浮かべる。

実はこのアーチャー、召喚された後に（召喚儀式の失敗のせいで）散らかった部屋の片付けを命じられ、分かりやすく拒否したら令呪で絶対服従を取り付けられてしまったのだ。

掃除をさせるために令呪をひとつ使うマスター。色んな意味で前例がない。

そういうことで。

「……………了解だ、マスター」

降参、と両手を上げ、いかにも渋々といった態度で凜を抱え、ランサーの後を追う。

その抱え方は、俗に言う『お姫さまだっこ』だった。

ところ変わって、校舎へと逃げ込んだ男子生徒――衛宮　士郎は三階の廊下にへたり込んでいた。

「ハッ……ハッ……ハッ……ッ！」

苦しい。全力で走りここまで逃げて、しかし今もなお精神を蝕む恐怖の感情。

身体的な疲労と精神的な疲弊。内外の消耗は、士郎にこれ以上走るのは無理だと主張していた。

と、

「よっ」

唐突に右側からかけられる声。振り向くと、鎗を持った武人が獣のような笑みを浮かべこちらを覗き込んでいた。

「う、うわああッ!？」

「案外逃げたな、お前。まあ、恐怖で立ち竦んでる奴を殺すつても胸糞悪いからな。ちよつとは楽しめたぜ」

鎗兵は紅い鎗を振り回しながら言う。その態度には警戒の色もない。

たとえ士郎が反撃してこようとしても対処可能という、絶対的な確信あつての対応だろう。

サーヴァントにとって、人間を殺すことなんて赤子の手をひねるほど簡単なのだから。

「じゃあな、ボウズ」

鎗兵は弄んでいた鎗の切っ先を士郎の身体へ向ける。

「……………ッ!」

そして。

衛宮士郎の人生は今宵、あまりにあっさりと幕を閉じた。

「……………ッ!? 士郎!」

自室で復習をしていた衛宮志音は義兄の異変を感じ取った。

志音は士郎にひとつの魔術を施していた。

それは、士郎の命の危機をリアルタイムより早く《・・・》察知できる術式。

それにより、志音は『士郎が鎗兵に殺される』という未来を感じ取り、そして迅速に対応した。

まず対魔術師用の礼装及び魔術刻印の状態確認。ついで対サーヴァント用の武装一式の点検と装備。それらをわずか三十秒で済ませ、履き慣れた運動靴を履き外へ出る。

（あのバカ！ 早く帰ってこいって言ったのに！！）

心の中で士郎に怒鳴りながら駆ける。身体に強化魔術を施し、世界的スプリンターでも難しいだろうと思われる速度で穂群原学園に向かう。

そしてもう一組。

穂群原学園に向かっているマスターはひとりだけではなかった。

英霊召喚 騎士王アルトリアに続く。

初戦開幕 - 1 紅い弓兵、蒼い鎗兵（後書き）

刺し穿つ死束の槍 グレイ・ボルグ

ランク：B

最大捕捉：一人

レンジ：1～5

特性：因果を逆流させ、『原因』と『結果』を反転させる魔槍。すなわち『放ったから当たった』のではなく『当たったから放った』となる。

このため、真名解放されたこの槍による攻撃は回避不可能であり、また心臓を破壊するため発動されれば生き延びることのできる確率はほぼあり得ない。

因果を歪ませるほどの幸運を持つか、何らかの加護を受けている場合、初めて生存可能（ただし負傷は免れない）。

消費魔力は他のサーヴァントの宝具と比べても著しく低く、当たれば確実に倒せる一撃必殺のため、対人においては非常に効率のよい宝具である。

干将・莫耶

ランク：D

最大捕捉：--

レンジ：1～3

特性：中華の刀鍛冶、干将の作の白黒一对の夫婦剣。この剣は互いに引きつけあう特性を持ち、それぞれ逆方向に投擲したとしても、引っ張り合うかのように同じ場所に集おうとする。それ以外は何の特徴も持ち合わせない、聞こえは悪いが地味な剣である。

ただ、この剣を使った英雄は存在せず、アーチャーが使った干将・

莫耶は彼が何らかの手段で造り上げた贋作である。ただし、その完成度は本物と比べても遜色なく、本物と偽物の区別をつけようとするのが馬鹿馬鹿しくなるほどの出来。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065z/>

FATE/Cross Over story

2011年12月31日06時46分発行